

第2部 マニュアル編

第1章 マニュアル編の構成と内容

第1節 構成と内容

第二部「マニュアル編」では、ビデオモニタリング技法による求職面接スキル訓練プログラムのマニュアルについて解説する。本訓練プログラムは、第1部「研究編」で詳述したように、障害者職業総合センターにおける実験的施行等を通じた検討を経てきているが、現時点においては十分でない点多々あると思われる。従って、これがたたき台となり、より良い訓練方式が訓練・臨床現場から出てくることを希望する。その点からも極力利用していただき、様々な批判を仰ぎたいと願う次第である。また、本訓練マニュアルの付属品として制作した教育用ビデオ「職業準備訓練生のための面接の受け方」も併せて利用していただければ幸いである。以下に本編の構成と内容を示す。

本章「マニュアル編の構成と内容」では、第2節において訓練の基本的な考え方及び主要概念となる用語について解説する。

第2章「ビデオモニタリングの手続きを用いた訓練方法」では、訓練の進め方を順次具体的に解説すると共に、訓練参加を希望するクライアントのスクリーニング方法、訓練効果の評価方法及び面接以外の対人場面への汎用案に関しても触れており、マニュアル編の根幹になる部分である。従って、本訓練プログラムを施行する際には必読すべき箇所である。

第3章「訓練参加が困難なクライアントのためのオプションガイド」では、第2章で解説したスクリーニングテストの結果、本訓練への参加が困難と判断されたクライアントへの補助的指導法に関し概説した。

第2節 訓練マニュアルの主旨と用語

本訓練マニュアルにおいて使用する学術用語に関する解説を通じ、訓練の主旨を述べる。

(1) ファシリテーターとクライアント

本訓練マニュアルでは一貫して、訓練者側を「ファシリテーター」、被訓練者側を「クライアント」と呼ぶ。共にRogers,C.Rの来談者中心療法の考えから出てきた用語で、クライアントは「受動的な患者ではなく、主体的な被相談者」、ファシリテーターは「指示的な治療者ではなく、コミュニケーションの探求を促進する人」という意味をそれぞれ持つ。本訓練では、クライエン

ト自身が不適切な部分に自ら気づき修正するといった形式を企図しており、その点から、上記の用語を採用することにした。

(2) ロールプレイ

社会的スキル訓練における評価と訓練のきわめて一般的な方策の一つで、被訓練者が模擬的な対人場面でも自然な環境と同じように行動すると仮定して、模擬場面を設定し、対応時の行動観察・行動評価及びそれらを基礎としての訓練を行うこと。本訓練場面ではファシリテーターが面接官となり、クライアントが面接者となってロールプレイを行う。

(3) ビデオフィードバック

「ビデオテープフィードバック」ともいう。訓練場面をビデオカメラで撮影し、問題となる行動を改善するために、記録したテープの一部或いは全部を再生して見せる。ビデオフィードバックは、行動の言語的及び非言語的要素の両方を視聴覚を通し具体的に提示でき、効果的である。本訓練では次に述べるモデリングとモニタリングの組合せ手続きと併せて利用する。

(4) モデリングとモニタリング

「モデリング」とは、手本を見てその言動をまねること、他人の行動を観察し、その行動様式を学習することで観察学習とも呼ばれる。本訓練では、教育用ビデオやクライアント自身のロールプレイを記録したフィードバックビデオを素材として、モデリングを行う。また、フィードバックビデオに関しては、自分や仲間のロールプレイを観察・評価しながら、修正すべき点を確認し、技能向上に役立つ「モニタリング」の手続きも併せて行う。これらの組合せを「ビデオモニタリング技法」と名付け、本訓練における技法を表す用語とした。

(5) 小集団訓練と集団の効用

本訓練では訓練形態として小集団を選択したが、その理由の一つは経済性である。多くの訓練・臨床現場ではスタッフ数の不足から、可能な項目はできるだけ集団で指導することが望まれている。従って、本訓練では訓練手続きを構造化し、更にビデオを用いることにより、集団実施での効率化を企図した。また、集団で実施することで、ファシリテーターだけからアドバイスを受けるのではなく、仲間同士で指摘し合うことで相互啓発の機会が増すこと、仲間のロールプレイを見ることで様々なモデルを体験できること等といった集団の効用が期待できる。

(6) 般化

元々は、条件づけ理論において、ある刺激に対して特定の反応が起きようになると類似の刺激に対しても同様の反応が起きようになることを表す用語であったが、訓練研究においては、「訓練場面で学習したことを実生活における他の場面でも実行できるようになること」を示す。訓練場面で適切な対応ができていても、実際場面でそれらが発揮できない場合は、社会的に有効性を持ち得ない。従って、訓練に協力してくれる会社があれば、そこを利用し般化訓練を行うことが望ましい。

また、研究編で詳述した通り、面接訓練に含まれる下位スキルは、場面を超えて般化することから、面接以外の対人場面にも応用できるものがある。

参考文献

A.S. Bellack & M.Hersen eds. :Dictionary of Behavior Therapy Techniques. Pergamon Press,1985, (山上敏子監訳、行動療法事典 岩崎学術出版社 1987)

伊藤隆二編： 心理臨床法ハンドブック 福村出版, 1988

R.P. Liberman et al.:Personal Effective Guiding People to Assert Themselves and Improve Their Social Skills. Research Press, Illinois,1989 (安西信雄監訳： 生活技能訓練基礎マニュアル. 創造出版, 1990)